



二俣川小だより



夏休み号

横浜市立二俣川小学校 平成28年7月21日

発行責任者 校長 野田 こずえ

いよいよ夏休みです

野田 こずえ

1年生が植えたアサガオが毎日色とりどりの花を咲かせ、4,5年生が植えたヘチマやツルレイシは2階に届くほどに伸びてグリーンカーテンらしくなってきました。収穫したトマトやオクラなどの夏野菜を大事そりに持ち帰り2年生の姿も見られます。プールサイドに歓声の響く日も増え、学校はまさに夏本番といったところです。

わたしは、小学校の頃、夏休みはさほど楽しみではありませんでした。わたしの家は小さな食堂を営んでいて、母はほぼ年中無休で働いていました。夏休みになったからといって、周りの友達のように海に連れて行ってもらえるわけでも、一緒に工作をやってもらえるわけでもありませんでした。公園に行けば誰かしら遊ぶ相手はいましたし、毎朝のラジオ体操や町内対抗ソフトボール大会の練習で、そうそう退屈ばかりではなかったのですが、「親と一緒に」ということを求めているのかもしれない。何年生の頃だったでしょうか。缶切りを使えるようになったのが嬉しくて、店でかき氷用に使うコンデンスミルクのふたを開けさせてもらうように頼んだことがあります。ちょうど店が立て込んできている時で、「遊びじゃなかとよ。」と、こっぴどく叱られてしまいました。次の日、お客さんのいない時を見計らって、「そろそろミルクがなくなるけん、缶ば開けとって。」とミルクの缶と缶切りを手渡されました。「急ぐときは困るばってん、時間のある時に手伝ってくるっ(手伝ってくれると)助かるよ。」と言ってもらえて、缶を開けられた以上に嬉しかったのを覚えています。カレーを作るのにジャガイモやニンジンの皮をおかしてもらうのも楽しみだったのは、自分が役にたっている気がしたからでしょうか。家の掃除などの手伝いもしましたが、こちらはなんだかやらなくてはいけないこと、やらされていることという気がして、好きではありませんでした。それだって十分役に立っていると思うのですが、子どもの感じ方は不思議なものです。お店にかかわることは友達にはできない特別なことと感じていたのかもしれない。

さて、明日からはいよいよ夏休みです。子どもたちはどんな夏休みを過ごすのでしょうか。そして、大人になっても覚えているのはどんなことなのでしょう。意外と、遠くに出かけたことではなく家の中や近所の神社の境内のできごとだった、なんていう子もいるような気がします。「どこで何をした」ということよりも、「誰とどんなふうにごした」ということが大事なのかもしれませんね。料理をしたり工作をしたり読書したり…と、これは毎年同じことを書いている気がします。先日、四季美台のお祭りにお邪魔した時、たくさんの子もたちが櫓の上で踊っていて、それを保護者の方だけでなくまちの皆さんが「上手でしょう。練習したんですよ。」と言いながら温かく見守ってくださっている様子を見て、いつまでも残したい夏の風物詩だなあと思いました。遠くの海でも近くの公園でもお子さんと一緒に笑顔いっぱい過ごす夏になることを、願っています。

閉庁期間の緊急連絡先について

8月8日(月)～8月12日(金)を閉庁期間とします。この期間は、学校として対外的な業務は行いませんので、直接の連絡は取れません。緊急の連絡は以下の番号をお願いします。

西部学校教育事務所指導主事室 336-3743